
プロジェクト報告

農地改革期におけるアシエンダの脱一般化と アンデス農民の論理の探求に向けて

大 貫 良 史

1. 本研究の背景、概要、目的

これまでのアシエンダ研究において「アシエンダ」とは、当時の社会・経済関係の中で発展を阻害する要因として捉えられてきた結果、現在でもこのアシエンダ史観に基づいて議論がなされることが一般的である。また、このような認識は、アシエンダ解体に向けた農地改革の理論的根拠にもなってきた。

現在までに農地改革の不手際や弊害など、農地改革の効果とプロセスを検証することは様々なレベルで行われてきた一方で、当事者であったアシエンダ自体の分析は驚くほど少ない。

この理由には、アシエンダそのものの資料、いわゆる内部資料が非常に少ないという問題もあるが、アシエンダの否定は古い慣習や支配体制の否定と同義であり、イデオロギー的にも強く支持された、いわば否定しがたいステレオタイプの確立であったためともいえる。

今回、アシエンダの脱ステレオタイプ化を目指したのは、ひとつには近代が切り捨てていったものをそのままに捉え直してみたいという思いからであり、またそれと同時に、山岳部のほぼすべての土地がアシエンダに帰属していたということは、ほぼすべての先住民は程度の差こそあれ、皆、アシエンダと関係を持っていたことになる。このようなことから、アシエンダと先住民の関係を捉えなおすことで、彼らの論理、すなわちアンデス農民の在来知の理解につなげる一歩なるのではないかと考えた。

2023年の日本ラテンアメリカ学会において、本プロジェクトメンバーの一人である鳥塚あゆちの発表で違和感を覚える出来事があった。

鳥塚発表では、近年、市場価値の低い有色アルパカを増やしている農民が増えている

という報告があり、それに対してオーディエンス、コメンテーターから「利益にならないのになぜそんなことをするのか疑問だ」という発言がなされた。

これは、アルパカ飼育は売毛が目的なのだから、経済合理的に考えたら市場価値の高い白色のみを飼育するのが自然だという市場原理ありきの視点であり、この発言がコメンテーターである人類学者から出たことも私にとって衝撃だった。アンデス農民の行動や思考を考える際に、合理的経済人の前提が潜在意識として定着していることは大きな問題だと感じた。

資本主義の普及以後、我々は人々の行動やその理由の解釈にあたって、その帰趨をあまりにも経済的動機に求めすぎているように思う。アンデス先住民の行動と論理の理解は、彼らの世界観にまでかかわることであり、さらなる観察と分析が必要であろう。

2. 本研究の成果、実施状況

本研究の遂行にあたり、複数回の研究会を通じて、発表と有意義な意見交換を行った。また、最大の成果として、第45回日本ラテンアメリカ学会において研究発表を行うことができた。以下、その概要を述べる。

3. アシエンダの脱一般化とアンデス農民の論理を探る

まず、アシエンダとはなにか。J. マトスと J. メヒアによる定義では、従属労働と支配関係に基礎を置く、大規模な土地経営のための組織である「アシエンダ」と、中小規模の民営地である「小アシエンダ・資本主義的民営地」の二つに区分され、前者はさらに「資本主義的」「半資本主義的」「伝統的」、後者は「小アシエンダ」「資本主義的民営地」に分類できるとされるが、そのアシエンダが海岸部のものなのか山岳部のものかなど、その他様々な要素によりその様態も一様ではないため、必ずしもこの分類に従う必要はない (Matos Mar, Mejía 1980)。

一般的なアシエンダのイメージはネガティブで、学術的な評価も経済・社会関係の障害という認識が主流である。それゆえ農地改革があったわけだが、この農地改革自体の評価や検証はされても、アシエンダがそもそも本当に経済・社会的障害だったのかについては必ずしも検証が進んでいるとはいえない。アシエンダは、ペルーの経済・社会史のコンテキストの中で「アシエンダ=非効率、封建的」等のステレオタイプで語られ続けた一方で、個別の事例研究は少ない。

とはいえ、広大な土地の占有や労働力の固定化など非効率な資源配分は経済学的な発

展という意味では当然障害となるであろうし、その点で農地改革自体は必要なものであっただろう。

一方で生産性という面では、農地改革後、アシエンダに代わって誕生したコーペラティーバやSAIS等が短期間に経営破綻した等の失敗例が多いというのはよく知られており、生産主体の収益性や効率性は、アシエンダ解体によって必ずしも改善されたというわけではなかったのも事実である。

農地改革期のアシエンダ解体に向けた道筋には、いくつかのルーツがあった。一つは南部で激しかった農民運動、つまり土地の利用に関する不満から発したもので、もう一つはイデオロギーやモラル的な観点から、都市部の知識層の間で議論が盛り上がっていった部分で、この後者の言説がアシエンダのステレオタイプ化を強化し、後の農地改革を進める根拠の一つとなっている。

また、全てのアシエンダがステレオタイプで強調されるような、封建的で極端に暴力的、搾取的であったなら、基本的労働力をコムニダをはじめとする先住民に依存する以上、運営自体が成り立たなかったはずだ。アシエンダがガモナル（暴君的アシエンダの蔑称）的である一方で、労働力を確保するための懐柔策も必要であり、コンパドラスゴなどはその一例といえるだろう。

他方、アシエンダによる支配について木村秀雄は次のように指摘する。

アシエンダの廃止とは、先住民に対する制度的な拘束が無くなるということだが、「支配—保護」は表裏一体であり、拘束がなくなり自由度が増すということは保護もなくなることを意味する。先住民の置かれた環境は、アシエンダという保護が消えることで社会的支配から市場経済的支配へ移行しただけともいえる。また、身分支配が解消され、先住民たちが閉塞状態から解放されたことは確かだが、この閉塞こそが先住民たちの文化的・社会的独立を確保していたという側面も認識しておく必要がある（木村 2018）。

最後に、アシエンダ解体後に組織されたコーペラティーバをはじめとする協同組合が、ほどなくして経営に躓くということがよくおこったが、なぜコーペラティーバの衰退が常態化したのかについて考えてみる。

先住民はもともと共同体単位で暮らし、そこには共有地をはじめとする共有財産があり、私有権に基づく市場経済的原理のない互酬の経済が成り立っていたと考えられている。このため、協同組合経営は共同体の運営に慣れた先住民にとって「向いている」組織及び運営方法だったはずだが、実際にはほとんどの地域で協同組合は解散もしくは機能しなくなった。

その理由として挙げられるのは、そもそも先住民の共同体とは利益を目的とした集団ではないことである。共同体は、経済学でいう「利潤の最大化」という経済合理性や公

理を持っておらず、その意味で利益追求のため設立されたアシエンダという制度と、根本的にその存在理由が異なっている。この違いが、彼らがアシエンダをうまく引き継げなかった要因なのではないか考えられる。

前述のように保護機能を失い市場経済に晒された共同体は、農地改革後、コーペラティーバを失い、さらには先住民共同体にある文化的要素をも失うという、共同体自体が変容を強いられた結果というものが現在の共同体の姿といえるのではないだろうか。

4. まとめ

アンデス先住民の社会・文化も様々な外的要因の影響を受け変容している。しかし、表面的な生活の質の変化よりさらに深いところで、先住民の知恵や慣習など、いわゆる「在来知」に根差す思考が際立つことがあるように思う。

我々は他者のふるまいを理解しようとするとき、我々の社会、文化に照らし合わせ、その尺度でもってどんな意味があり、どのような動機なのかを判断しがちだ。つまり、我々の世界でいうところのこういうことだろうという解釈である。

例えば、アンデスで非常に多くの種類のジャガイモを少量ずつ栽培することや、垂直統御のように高低差を利用した農業を、病害のリスク回避などの生存戦略の一種と考えたりすることはその一例であろう。しかし、彼らの中では、このような効率性を重視する合理的経済人とは全く異なる論理によって、その行動が規定されているのかもしれない。

カール・ポランニーによると、資本主義のもとでは、人々は経済的動機が唯一の労働誘因になると考えられているが、実際には人間はそれほど利己的ではなく、驚くほど混合的な動機に基づいて行動しているという。もし、利得の動機が普遍的であり、経済的動機が人間にあるのが自然であるとするなら、生産及び交換によって利潤を得ようとする欲求を全く持っていない原始経済を説明することはできないし、初期の原始社会のすべてが全く不自然な社会であったと判断せざるを得なくなってしまうと述べている（ポランニー 2003）。

また、垂直統御についても、大貫良夫が次のように述べている。

山一村一谷という高低の位置関係並びにその間の移動が、アンデスの人々の世界観あるいは象徴体系と何か結びついている可能性がある。人々にとって、高いところにあるプーナとは何を意味しているのかや、反対に谷に下るという行為は何を意味しているのか、色々な地形と、そこへ到達する行為が何かシンボリックな意味を持っているはずで

ある。(中略) いくつかの生態学的ゾーンの開発は、ひとつのゾーン(自然区分帯)だけでは自給自足できないからではなく、単に食料や生活材の内容を豊富にするという経済的要因以外に、儀礼とのかかわりという要因があったのではないか(大貫 1979、p.731)。

アンデス高地の垂直統御は、世界観あるいはシンボル体系に裏打ちされた経済行為というべきで、生物学的生存だけに理由を求めるべきものではない。

アシエンダとアンデス住民の関係性は、単なる雇用関係から住居を構える小作農、広大な領地の一角で放牧を行う者など、アシエンダとの関わり方は一様ではなく、また先住民側にも共同体の変容を通じて意識の変化があった。平面的な構造にのみ捕らわれることなく、通時的な視点からの関係性の変化に、常に注意を払わなければならない。

アンデス農民の行動の観察から在来知に根付く自然との共生やレジリエンスの可能性を理解することは、人新生と呼ばれる時代に突入し軌道修正を迫られている我々に、人類があるべき姿に向かうためのヒントを与えてくれるだろう。

本報告で、限られた資料を用いながら、ステレオタイプと異なるアシエンダ像を提示することを通じ、アシエンダと農民の関係性の再考と、アンデス農民の思考と行動の論理の理解につなげていくことの可能性を指摘できたことは一つの成果としたい。

参考文献

- 大貫良夫 「アンデス高地の環境利用：垂直統御をめぐる問題」『国立民族学博物館研究報告』、巻3、号4、pp. 709-733、(1979)
- 木村秀雄 「農地改革期クスコ農村社会の多様性と制度」『アンデス・アマゾン研究』、1巻 pp.1-54、(2018)
- ポランニー、カール 『経済の文明史』玉野井芳郎他訳、筑摩書房 (2003)
- Matos Mar, José, y Mejía José Manuel *La reforma agraria en el Perú*. Instituto de Estudios Peruanos, (1980), Lima.